

第一の分担研究テーマ「相互作用と乳幼児の心理・行動発達に関する基礎的研究」のうち、比較行動学的研究として、三吉野氏ら、糸魚川氏らによるニホンザルの行動発達に関する研究は、ヒトの育児と対比して興味深いものがある。また、サル小脳における神経活性物質が胎生期から成熟期にわたって変化する様相について追跡した大島氏らの基礎研究は、神経機能の発達との関連において示唆に富むものである。

一方、胎児行動の指標として心拍数変動を用い母体行動の影響をしらべた水野氏らの研究、胎児発達過程における口唇運動に関する中野氏らの研究は、胎児の行動発達と相互作用の解明に資するものといえよう。

つぎに、乳児の対象認知における母親のかかわりに関する利島氏らの分析研究は、母親の介在が重要なことを示唆しており、さらに問題児についても検討されることを期待したい。また、施設保育については議論の多いところであるが、保育園児についての行動観察を通じて家庭外保育と家庭保育の相互作用を検討する小嶋氏の研究を注目したい。

乳児が母親と他人に接した場合の反応をサーモグラフィにより追跡した水上氏らの研究は、相互作用を定量的に評価する方法としての情報工学的研究の成果であり、一連の研究に寄与するところが大きい。さらに、石井氏は情緒反応を観測するための高速信号処理システムの開発に取り組んでおり、生体情報の計測に一層貢献されることを期待したい。

また、前川氏はかねてより乳幼児の気質に関する研究として、行動様式質問紙の標準化をすすめており、育児指導に資する臨床的研究として高く評価したい。

第二の分担研究テーマである「小児期の成長・発達と養育条件に関する医学的、心理学的及び社会学的研究」のうち、八倉巻氏らの食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究は、食生活と成長発達との観点において重要な課題である。養育条件のうちの父母の養育態度形成に関する高橋氏の研究は、母親の育児不安に対する父親の育児参加・協力状態との関連性を検討したものであり、時宜にかなったものといえよう。さらに掘り下げて問題点を検討してもらいたい。

乳幼児の健康・発達に影響を及ぼす社会環境的条件に関する高城氏らの研究は、物的環境ならびに人的環境要因との関連において各方面の専門家が協力して調査分析を行っており、大型研究の利点をいかしたものであるが、さらに安全面などの観点からも検討をすすめて環境改善に役立ててほしいものである。

わが国では思春期についての研究や対策が非常に遅れているが、村田氏らの思春期小児の健康に対する家庭保健のあり方に関する研究は大いに期待されるところである。特に思春期の反社会的な生活行動、若年妊娠、成人病危険因子に対する対策などの問題はいずれも現実に直面している重要課題である。

親子関係の失調に関する社会病理的研究として、松井氏は被虐待児症候群についての調査研究をすすめているが、養育者の要因が大きく関与しており、再発の危険性のある程度予測できるということは対策につながる成果といえよう。また、かねてより自閉症の病態を勢力的に研究している瀬川氏は症状発現の臨界年齢を明らかにし、治療と予防の方法を開発しようとしているが、その発展と成果に期待をかけたい。

小児の成長についての研究として、東郷氏らの地域差に関する研究がとり上げられているが、高石氏らによる昭和65年の乳幼児身体発育調査についての検討は同調査を一層意義あらしめるため必要であり、関係者のご協力をお願いしたい。

今年度は研究テーマの内容が整えられ、家庭保健との関連をめざした協同研究にまごがしぼられてきたように思われる。このチームワークをくずさず明年は有終の美を飾られるよう切望してやまない。（昭和63年2月26日、27日に開催された研究報告会の講評要約）